

南伝大藏經の経蔵完成

「ブツダモントン」に世界最大の経蔵

〜タイ・今世紀最高の偉業にわく〜

日本バクナム会会長 黒田武志

平成十年（一九九八年）十二月二十七日から

今年一月一日にかけて、私は仏教の聖地・タイ国へ、ワット・パクナムの招待を受け訪問してまいりました。インドシナ半島の中心に位置し、日本の約一・五倍の広さを持つこの国の国民の九十五パーセントは敬虔な仏教徒。人々の信仰心の深さには、タイを訪れるたびに感動させら

れます。

ドン・ムアン空港から市街地とは反対方向、新しく完成した高速道路で三十分ばかりの郊外（ナコン・パトム）に、二・五キロ四方の土地にブツダモントンと呼ばれる場所があります。この地は仏暦二五〇〇年（一九五七年）を記念して、タイ国政府と国民が一体となって、仏教

関係の施設を建立発願した所であります。いったんは工事を中断したものの、その後計画は順調に進み、半世紀の歳月をかけて、一部の建物をのぞき完成いたしました。

その施設を簡単に説明しますと、土地の中心地には約十六メートルの黄金の仏陀の立像がおさめられ、その周りには数多くの建物、仏教研究に関するセンター、瞑想、仏道センター、集会ホール、仏教博物館等完成し、今図書館が建築中であります。

そして昨年の秋には、ワット・パクナムの力で十年の歳月をかけて、今世紀最高の偉業と思われる『南伝大蔵経』の経・律・論の三蔵を大理石の板碑にきざみ、それをおさめる経蔵が完成し、落慶式がとり行われました。この式典に招待いただき列席いたしました。

瞑想の寺ワット・パクナムの僧侶たちが、大理石の石板にパーリ語で一字一字、精根こめて

手彫りし、十年間かかって完成させたものです。板碑一枚の大きさは、横一・一メートル縦二メートル、その数、表裏合わせて一四一八枚。二枚の大理石を張り合わせて七〇九枚の石碑がまるで遠く続く続壁のようにズラリと並び、一枚一枚に隙間なくびっしりと書かれたパーリ語の教典―忍耐と努力の結晶と言えましょう。

大理石の上方には、お釈迦さまの前世の物語である『ジャータカ物語』から、現代のワット・パクナムのご住職の一代記までが絵物語として鮮やかな色彩で描かれています。

私は、その崇高な空間にしばらく呆然と立ちすくんでしまいました。経蔵内の板碑から、絵物語から、そして全体を包み込む聖なる空気から、ふるえるような感銘を受けていました。まるで宇宙との一体感を味わっているような…。

一カ寺の発願で、このような偉業を成し遂げるとは！改めて、若き日修行したワット・パ

クナムのすばらしさを思い起こしたのでした。

タイ国には約二万五千のワット（僧院）があり、僧侶の数は二十万人にのぼります。この国では一生に一度、二十歳に達する男子が剃髪して得度出家し、僧侶の生活を経験する習慣があります。だいたい七月から十月までの雨期に出家する一時僧が増えるため、その数は三十万人に高まることもあります。このような生活習慣がなぜあるかは後で記すとして、とにかくその膨大な数のワットの中でもワット・パクナムは「瞑想修行のメッカ」として知られており、また、日本とタイとの仏教交流の要ともなっているお寺なのです。

私が修行いたしましたのは昭和三十八年（一九六三年）、大本山總持寺の特別僧堂第一期生としての修行を終えて、インド仏蹟巡拝に参加したその足で、同安居の石附周行師とそのままタイ国ワット・パクナムで得度、修行生活に入り

ました。ワット・パクナムは、バンコクにつぐ都市トンブリにあります。バンコクとは少し離れた静かさをまだ持っています。私がいた頃も、川に浮かぶ舟上で生活する人々がほのぼのと暮らしていました。朝は手の平の線が見える頃に托鉢し、早朝と正午の食事以外は、瞑想と、仏教学、パーリ語学等の学習をする生活でした。寺の中に典座寮（食堂）があるのは、ワット・パクナムのロンポー（父）と呼ばれるチャオ・クン前任職（プラ・モコン・テムニー師、独自の瞑想法の実践により、涅槃を得る道を弟子やたくさんのお信者に伝導した）がタイで初めての大改革をしたもので、修行僧たちが托鉢に費やす時間を瞑想・修行弁道にあてられるようお願いをこめて作られたのです。おかげで思う存分学ぶことができました。上座部仏教、大乘仏教の教えを越えて感じた事は登る道は違えど頂点——真理——は一つ。宗祖を通して釈尊に還れを

私の宗教生活の原点とすることに決めたのでした。

ワット・パクナムで得た尊い修行体験を、後に続く修行者にぜひ味わってもらいたいと思いは、その後、善光寺留学僧育英会を設立してからは、十数人の若き僧侶を派遣し、タイ国からも修行僧を受け入れてきました。日本とタイとの相互理解と仏教文化の交流の一環として、善光寺開創二十周年記念には、プミポン陛下還暦記念に出版したタイ語パーリ大蔵経をいただきました。

又、「日本文庫」を多くの方々の協力を得てワット・パクナムに開設いたしました。そして私の息子四人もワット・パクナムご住職プラ・マハージャマンガチャラ殿下に得度していただきました。いつでもご住職は私をわが子のように温かく迎えてくださり、日本という国にも大変親しみを感じてくださるようになりました。

大本山總持寺宝物館にあるタイの仏像は、親善の意味でワット・パクナムから贈呈されたものであり、大本山總持寺としては、当時の貫首岩本勝俊禪師が『南伝大蔵経』（昭和十年に印度学仏教学者高楠順次郎博士が国訳し全六十五卷七十冊）を進呈し、又、昭和五十五年前後四年間に約十名近くの雲衲の方々が、タイ国世界仏教徒連盟事務次長小谷亀太郎先生のお世話で、タイ国ワット・パクナムで得度・安居いたしました。

タイと日本の親睦の象徴のようなパーリ語『南伝大蔵経』のすべてが、今、大理石に刻み込まれ、目の前に広がっている。感無量でありました。この世界最高の経蔵を包み込む「ブツダ・モントン」のスケールの大きさ、偉大さ：日本ではとても考えられないことです。タイ国民の聖なる魂が込められているということを深く感じました。仏教—仏陀の教えは、二千数百

年の時を越えてもなお、当時と同じように民衆の心の中に生き続けているのです。

仏陀とは、「真理に達せる人」という意味で、仏教の開祖をゴータマ・ブツダといい、釈迦族出身の聖者ということで、尊称として釈尊（釈迦牟尼世尊）と呼んでいます。

釈尊は、「あらゆる存在は生滅変化して、永遠に存続するものではなく、すべてが苦であり、煩惱^{ぼんのう}を断じ、真理と合一した境地、涅槃こそが理想の境地である」と説かれました。すべて欲望を捨て正しく生きることによって、苦の世界から解脱することができるとタイの人々は思っています。また、輪廻し来世で生まれ変わることを自然に信じていて、来世で苦しまず幸福になるために、現世で一所懸命に徳を積もうとするのです。このことをタイの人は「タンブン（積善）」（タンは積む、行う、ブンは功德の意味）といい、小さな種が大きな樹木となるように、



ささやかなりとも精一杯の供養の種を蒔けば、必ず大きな幸福が約束されることを深く信じて生きていくのです。特に仏法僧の三宝に供養することを重視しています。

タンブンの中で最高にして最善の行いとされているのが、出家することで、男子は成人すると出家する習慣があるのはそのためなのです。女性は「メーチ」と呼ばれる女子修行者にはなれても出家して僧侶となることはできないため、托鉢僧に喜捨することでタンブンします。施しを与えるというのではなく、「タンブンさせていただき救われました。心から感謝いたします。」という気持ちの持ち方が、どれほどタイの社会を穏やかに、心豊かにし、人々の目を輝かしていることでしょうか。

そして、こうした国中の人々の心が一つにな

ったからこそ、「ブツダモントン」が完成に至ったものと信じています。

十二月二十九日の式典には、タイ国中の高僧五百人、三十一日にも僧侶五百人と数千人の在家信者が集まり、ブツダモントンの南伝大蔵経経蔵の完成を祝いました。人々の純粋な喜びの波動が私の心にじかに伝わってまいりました。この国には、釈尊の魂がそのまま生きています。それをまざまざと感じさせられた一瞬でした。

私たち日本人は、すばらしい偉業を成し遂げたすばらしいタイの人々と共に、釈尊の教えを後世に伝えたい。今を生きる私たちの一番大切な使命であると、経蔵内の板碑を前にして、あらためて胸に刻みこんだのでした。